

訪問リハビリテーションにおける 作業の意味を理解することの重要性 ～日課である散歩の再開に向けての関わり～

医療法人社団 らぽーる新潟 ゆきよしクリニック
○清水美穂(OT)
高野友美(OT)
三村健 (PT)
荻荘則幸(MD)

はじめに

作業療法では、人が行うことを全て作業と捉え、対象者一人一人に合わせ手段または目的として、作業を用いている。

今回、「散歩がしたい」という症例の希望に沿って、当初は散歩を身体機能維持・改善のための手段として捉え関わった。

関わりを通して、症例にとっての散歩とは、楽しみや役割でもある目的としての作業だと担当者の認識が変化した。

症例にとっての作業の意味を理解することの重要性を実感できたため、その関わりを報告する。

症例紹介

- 85歳，男性
- 介護度：要介護2
- 診断名：変形性腰椎症
- 既往歴：右足関節捻挫
- 以前の日課：早朝の神社や港までの散歩
- サービス利用状況：訪問リハ週1回，通所介護週1回，通所リハ週1回

開始時評価（平成22年2月）

【主訴】長く歩くと右腰から足首が痛み外出できないため
歩きが良くなりたい

【身体機能】疼痛部位：右足関節内側，右肩関節，腰部，
左下腿

【歩行】独歩

【日常生活動作】Barthel Index 100/100点

【散歩状況】

- ほとんど実施していなかった
- 痛みが気になり歩くことに対して自信喪失していた
- 痛みの軽減のため「たくさん運動しなければ」と過度な運動をしたり，体調が優れず一日中寝ていたり運動量の調整が困難で痛みの増強を繰り返していた

問題点に対する介入

〈問題点抽出〉

- ①痛みが気になり、歩くことへの自信がない
 - ・既往歴による関節痛, 動作方法による筋肉痛
- ②過度な運動をする

【症例の運動に対する考え方】

- ・疲れるまで運動がしたい
- ・自宅内で行うストレッチなどは運動ではない

目標: 体調を考慮しながら日課として散歩ができる

散歩を通して、
痛みの傾向と運動量を把握することが重要

再評価（平成23年6月）

【身体機能】疼痛はみられるが、訴えが少なくなった

【歩行】歩容の改善がみられた

【散歩状況】

- ほぼ毎朝散歩を実施できるようになったが、中止する可能性がある
- 痛みの状態や体調に合わせた散歩ができるようになった
- 以前の日課であった神社までの散歩が可能となり、ゴミ捨てにいけるようになった

→1ヵ月後、訪問リハの頻度を週1回に変更した

経過①

平成22年2月散歩を実施するため訪問リハ開始

OTは「手段として」散歩を利用

- ・痛みの確認をしながら散歩を実施した
- ・時間や歩数をOTが計測・記録し、前回の記録と比較し助言した

歩くことや体力に対する自信がついて、自主的な散歩が可能

長時間の散歩を実施することが多くなり、痛みの増強がみられた

経過②

9月

散歩の頻度を増やすため訪問リハを週2回に変更

1ヵ月後

関わりを通して…

「釣り人や船が入るのを見るのが楽しみ」

「神社からみる朝日がきれい」

「ゴミ捨てに行きたい」

早朝に
散歩したい

定期的な散歩が可能

OTは「目的として」散歩を認識

平成23年4月痛みを考慮した散歩を再開

2ヵ月後

「歩きが良くなった」「痛みがない」と前向きな発言が多くなった

体調に合わせて、コース選択ができるようになった

体調を考慮しながら
早朝の散歩が日課となった

1ヵ月後
訪問頻度を週1回に変更

考察

～散歩という作業を通して～

【OTの認識】

平成22年2月

身体機能の維持・改善のため
「手段として」散歩を利用

平成22年9月

関わりを通して、症例にとって
早朝行う散歩に意味がある
楽しみ・日課・役割の獲得など
「目的として」散歩を認識

【症例の変化】

自主的な散歩を再開
運動量の調整が困難

散歩状況を記録し、OTに報告

日課として早朝の散歩を再開